

ナイチンゲール『看護覚え書』の草稿と思われるクロウド・モリス社刊“*The Art of Nursing*” (一九四六)

平尾 真智子

〔要旨〕ナイチンゲールの有名な著作『看護覚え書』には代表的な三つの版が知られている。今回初版の草稿と思われる文献が見つかった。それはクロウド・モリス社が“*The Art of Nursing*”として一九四六年に出版したものである。この文献はビショップとゴールデイのナイチンゲールの自筆の文献目録には含まれていない。この本の由来として出版社は、この本はナイチンゲールの一八五九年の一番最初に書かれた個人的な看護に関するノートの完全に新しく改訂されたものであると記している。この文献と初版の内容を比較した結果、『看護覚え書』として出版するときには、友人らの助言を取り入れ、有識者の間に議論を引き起こすような表現をやめたこと、医師が反感をもつような表現をやめたこと、書いてある内容がわかりやすい表現にかえたことがわかった。

キーワード——看護史、ナイチンゲール、『看護覚え書』

一、はじめに

ナイチンゲールの看護についての代表的な著作“Notes on Nursing—What it is, What it is not”（以下『看護覚え書』とする）は一般的に、『看護覚え書』⁽¹⁾（一八五九）（いわゆる第一版）、『増補改訂版看護覚え書』⁽²⁾（一八六〇）（いわゆる第二版）、『労働者階級のための看護覚え書』⁽³⁾（一八六一）（いわゆる第三版）の三つの版が知られている。一九九二年にスクレトコヴィッチにより、これら『看護覚え書』の三つの版の歴史的経緯や特色についての書誌学的研究書がまとめられた。さらに同氏は『増補改訂版看護覚え書』（一八六〇）に、その後ナイチンゲールが加筆した追加分や一八七五年に執筆した三言語からなる未出版の原稿を適所に挿入し、『看護覚え書』のあるべき姿⁽⁴⁾を備えた作品（いわゆる決定版）を自ら編集した。これらは一つにまとめられて出版され、日本語訳もでている。

このようにナイチンゲールの『看護覚え書』には代表的な三つの版があり、そのうち『労働者階級のための看護覚え書』（一八六一）は、一八六八年にナイチンゲール看護学校の生徒募集の記事が追加された改訂版が出されているので、厳密に言えば四種類が存在することになる。それにスクレトコヴィッチにより発表された一八七五年版を加えると五つの種類が存在している。

今回筆者はイギリスの科学史・医学史専門古書店 Patrick Pollack⁽⁵⁾より、一九四六年にクロウド・モリス社から出版されたナイチンゲール著と書かれた“The Art of Nursing”を入手した。この本は『看護覚え書』（一八五九）を出版する以前に、ナイチンゲールが『看護覚え書』の草稿としてまとめたと考えられるもので、彼女の代表作『看護覚え書』がどのような思考過程を経て構成されたのか初期の思考を知るうえで価値があると思われる。本稿ではこの本の構成と内容を分析する。

二、ナイチンゲールの印刷文献の書誌学的研究

ビショップ (W.J. Bishop) はナイチンゲールの印刷文献について研究した人物で、十年がかりでおよそ四十か所にかつたる図書館や博物館に分散しているナイチンゲール文献の一つ一つを調べ、これらの印刷文献に「一から一五〇までの番号をつけて整理した。彼はその全作業のほぼ終了する時点で亡くなり、彼のあとをゴールドデイ (S. Goldie) という秘書が引き継ぎ仕上げた。一九六二年に出版した本はナイチンゲール研究家にとっては貴重な文献となっている。⁽⁹⁾

今回研究の対象とした本は、Nightingale, Florence. *The Art of Nursing*. Claud Morris Books. London. 1946. 全ページで五十二ページの小さな本である(写真1)。本の大きさは縦二十一センチ、横一〇センチ、厚さ八ミリで本というよりは小冊子の体裁である。この本の出版元はロンドンのクラウド・モリス社で、出版年は一九四六年となっている。

イギリスの古書店 Patrick Pollack のカタログの本の紹介文には、

“A curious edition of ‘Notes on Nursing’, described by the publisher as ‘new and revised’. He also offers thanks to Miss P.E. Nutt for the use of some of Florence Nightingale’s letters. There is no indication in the text of the insertion of new material. NOT in BISHOP&GOLDIE.”

と記されている。⁽¹⁰⁾

これらのことから、この本は『看護覚え書』の興味深

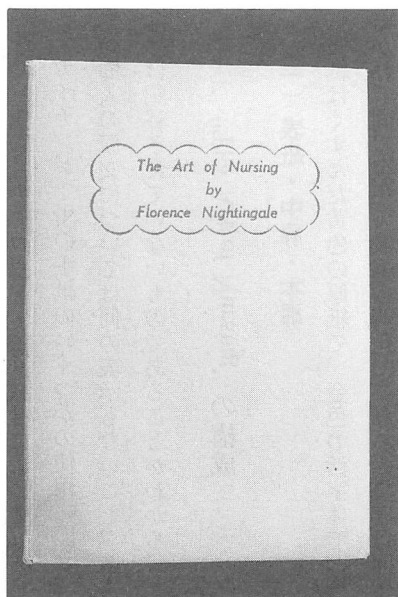


写真 1

い版で、出版社のクロウド・モリス社によって「新しく改訂された」ものであることがわかる。出版社はまたフロレンス・ナイチンゲールの手紙のいくつかの使用に関してミスP・E・ナット (P.E. Nutt) に感謝していること、新しい資料の挿入の原文については何の表示もないこと、さらにナイチンゲールの文献集を作成したビショップとゴールドデイの本には記載されていないものであることがわかる。

三 “The Art of Nursing” の構成

(一) 表紙・中扉・本扉

表紙はくすんだ黄色の厚紙で、金色の活字体で、The Art of Nursing by Florence Nightingale という文字が二段で書かれ、同じ金色の波線の四角でこれらの文字は囲まれている。表紙の内側は白紙で、次にもう一枚白紙がはさまれている。背表紙には同じ金色の活字体で、The Art of Nursing + CLAUD MORRIS と書かれている。裏表紙には文字の記載はない。

この本の中扉には本のタイトルが THE ART OF NURSING と活字体で書かれている。中扉の内側には、縦十二センチ、横九・五センチのナイチンゲールの肖像画が貼付されており、その下には一八五七年十二月二十八日、エンブリにて、ミス・フロレンス・ナイチンゲール (ナショナル・ポートレート・ギャラリーの絵から) と記されている (写真2)。本扉には、THE ART OF NURSING と書かれ、その数センチ下方に FLORENCE NIGHTINGALE の名前が記されている。一番下には出版社の CLAUD MORRIS の商標のイラストと CLAUD MORRIS BOOK LIMITED, COBHAM HOUSE, 24-26 BLACK FRIARS LANE, LONDON E.C.4. と出版社の名前と住所が記されている (写真3)。

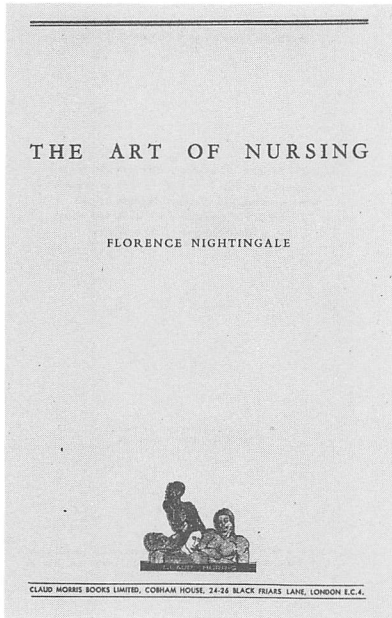


写真 3



写真 2

(二) 出版の由来

次のページ、すなわち本扉の裏側には、この本の説明と出版社に関する記載として次の四つの記述がある(写真4)。

最初に、本の主旨として、"An entirely new and revised edition of Miss Florence Nightingale's personal notes on nursing, first written in 1859." という文章が記されている。このことから、「一八五九年の一番最初に書かれたフロレンス・ナイチンゲールの個人的な看護覚え書きの完全に新しく改訂された版」であることがわかる。

次に謝辞として、"The Publisher acknowledges with gratitude the cooperation of Miss P.E. Nutt, in making available correspondence of Florence Nightingale, and of Colonel C.H. Paynter for a copy of the first edition of Miss Nightingale's Notes on Nursing." と記されている。このことから「出版社は、フロレンス・ナイチンゲールの書簡を利用できるようにすることに於いてミスP・E・ナット (P.E. Nutt) に、ミス・ナイチン

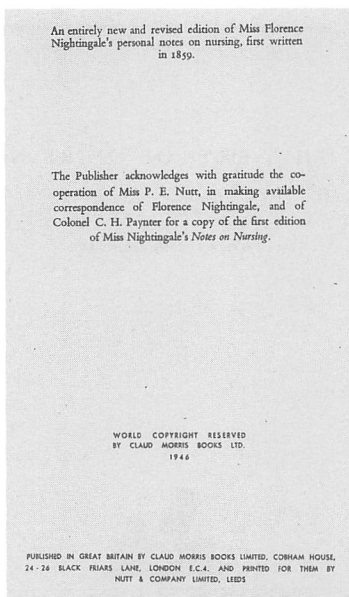


写真 4

ゲールの『看護覚え書』の第一版の冊子に関してC・H・ペインター(C. H. Paynter)陸軍大佐の協力を感謝して認める」となる。この文章における“Miss P. E. Nutt”と“Colonel C. H. Paynter”の人物については現時点ではよくわかっていない。⁽⁸⁾

三つめに出版社と出版年に関する情報として、“WORLD COPYRIGHT RESERVED BY CLAUD MORRIS BOOKS LTD. 1946”の表記がある。これらことから、

著作権はクロウド・モリス社にあり、出版された年は一九

四六年であることがわかる。

四つめにページの一番下に出版社と印刷所の住所として、“PUBLISHED IN GREAT BRITAIN BY CLAUD MORRIS BOOKS LIMITED, COBHAM HAUSE, 24-26, BLACK FRIAS LANE, LONDON E.C.4. AND PRINTED FOR BY NUTT & COMPANY LIMITED, LEEDS.”と書かれている。出版社はロンドンのブラック・フリアス通り二十四ー二十六にあるコバムハウスに住所があるクロウド・モリス社で、印刷はリーズのナットアンドカンパニーとなっているが、この印刷所のナットと上記のミスP・E・ナット(P. E. Nutt)との関連はわからない。

(三)「まえがき」「目次」「本文」

本扉の次ページは「まえがき」に相当するもので、“Every woman is a nurse”のタイトルが赤インクで印刷されている。その後にいわゆる『看護覚え書』という「まえがき」の部分に相当する内容が、五つの段落で二〇行にわたって

CONTENTS

CHAPTER		PAGE
i	Don't leave it to the doctor . . .	7
ii	Dangerous draughts . . .	9
iii	The health of houses . . .	12
iv	The fussy nurse . . .	15
v	The nuisance of noise . . .	18
vi	A little of what you fancy . . .	24
vii	Golden rules of diet . . .	27
viii	The battle of the beds . . .	29
ix	Doctor Sun . . .	32
x	Musty rooms . . .	34
xi	The dangers of dirt . . .	37
xii	The vicious visitor . . .	39
xiii	The wrong answers . . .	42
xiv	Testament for a good nurse . . .	49

写真 6

CHAPTER I

Don't leave it to the doctor

Shall we begin by taking it as a general principle that all disease is more or less an effort of nature to remedy a process of poisoning or of decay, which has taken place weeks, months, sometimes years beforehand, unnoticed?

In watching disease the thing which strikes the experienced observer most forcibly is that the symptoms or sufferings are very often not symptoms of the disease at all, but of something quite different—of the want of fresh air, light, warmth, quiet, cleanliness, or of punctuality and care in the administration of diet; of each or of all of these.

Disease is simply a reparative process which Nature has instituted.

If a patient is cold, if a patient is feverish, if a patient is faint, if he is sick after taking food, it is generally the fault not of the disease, but of the nursing.

I use the word nursing for want of a better. It has been limited to mean little more than the administration of medicines and the application of theories. It ought to signify the proper use of fresh air, light, warmth, cleanliness, quiet, and the proper selection and administration of diet—all at the least expense of vital power to the patient.

It has been said and written scores of times, that every woman makes a good nurse. I believe, on the contrary, that the very elements of nursing are all but unknown.

The very elements of what constitutes good nursing are as little understood for the well as for the sick. The same laws of health or of nursing, for they are in reality the same, obtain among the well as among the sick. The breaking of them produces only a less violent consequence among the sick than among the well, and this sometimes, not always.

7

写真 7

「目次」に相当するのが本扉の次ページの裏側の部分である。このページは CONTENTS (目次) となっており、全部で十四章から構成されている。結論の項目はない (写真 6)。七ページからは本文が開始となり、第一章 *Don't leave it to the doctor* のタイトルで始められている (写真 7)。各章のタイトルのみ赤インクで印刷されている。『看護覚え書』の第一版、第二版にみられるような本文の欄外の小見出しは記されていない。ページ数も初めて七と付されている。このページ以前のページ数の記載はない。以下ページ数は五

Every woman is a nurse

It seems a commonly received idea among men and even among women themselves that it requires nothing but a disappointment in love, the want of an object, a general disgust, or incapacity for other things, to turn a woman into a good nurse.

The following notes are meant simply to give hints for thought to women who have personal charge of the health of others.

Almost every woman in England has, at one time or another of her life, charge of the personal health of somebody, whether child or invalid. In other words, every woman is a nurse. Nursing is knowledge which every one ought to have—distinct from medical knowledge, which only a profession can have.

If, then, every woman must, at some time or another in her life, become a nurse—take charge of somebody's health—how immense and how valuable it would be if every woman would think how to nurse.

I do not pretend to teach her, I ask her to teach herself, and for this purpose I venture to give her some hints.

F. Nightingale

London, 1859.

写真 5

記されている。このページの最後には F. Nightingale の筆記体で自筆のサインが記され、London, 1859. と記されている (写真 5)。

「目次」に相当するのが本扉の次ページの裏側の部分である。このページは CONTENTS (目次) となっており、全部で十四章から構成されている。結論の項目はない (写真 6)。七ページからは本文が開始となり、第一章 *Don't leave it*

十一ページまで付され、最終ページはページ数の記載はなくTHE ENDで終了している。

四、"The Art of Nursing"と『看護覚え書』(一八五九)との内容の比較

"The Art of Nursing"の内容がナイチンゲールの個人的な看護の覚え書きであることから、この "The Art of Nursing"と『看護覚え書』^⑥両者の内容について、全体の構成、まえがきの内容、目次構成、各章の内容の四つの側面から比較をした。

(一) 全体の構成

"The Art of Nursing" (以下本資料とする)では、「まえがき」に相当する部分と全部で「十四章の各論」の大きく二つの部分で構成されているが、『看護覚え書』の方は、「まえがき」、「プロローグ」、「十三章の各論」、「結論」、「付録」の五つの部分から構成されている。本資料では『看護覚え書』にみられる欄外の小見出しはない。

(二) まえがきの内容

本資料のまえがきは大きく五つの段落から構成され「すべての女性は看護婦である」というタイトルがついている。これを『看護覚え書』と比較すると、『看護覚え書』では単なる「まえがき」(preface)のタイトルとなっており、文章によるタイトルはつけられていない。

次に「まえがき」の最初の段落の文章として「女性をよい看護婦にするには、失恋とか、目的を見失ったとか、世の中全体にいや気がさした、看護ぐらいしかできることがない、という理由があれば十分だ、との考えが、男ばかりでなく女にも広く見られるようである」という文章が続く。この文章は、『看護覚え書』では一番最後の「結論」の部分のな

表1 “The Art of Nursing”と『看護覚え書』の目次の比較
 “The Art of Nursing (本資料)” 『看護覚え書』

<p>すべての女性は看護婦である</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 医者任せにしないこと 2. 外気は危険か? 3. 家屋の衛生 4. 細かすぎる看護婦 5. 音の害 6. ちょっとした配慮 7. 食事指導原則 8. 寝具との奮闘 9. 太陽光線の役割 10. よどんだ部屋 11. あかの危険性 12. 害ある見舞い客 13. 不適切な返答 14. よい看護婦の証し <p style="text-align: right;">(筆者訳)</p>	<p>まえがき プロローグ 換気と保温 家屋の衛生 ちょっとした管理 物音 変化のあること 食事 どんな食べものを? ベッドと寝具 光 部屋と壁の清潔 身体の清潔 期待や助言のおしゃべり 病人の観察 結論 付録</p>
---	---

かほどにおかれており、ずいぶんと後ろに配置されているのが特徴的であることがわかる。

(三) 目次構成

表1は本資料と『看護覚え書』の本の目次構成を比較したものである。この二つの文献を比較すると、各論の第一章の部分が大きくタイトルが違っていることがわかる。つまり本資料では「医者任せにしないこと」となっているのが、『看護覚え書』では「換気と保温」となっているのである。本資料の第一章のタイトルと内容は、『看護覚え書』では「プロローグ」のタイトルのもとの内容となっており、「医者任せにしないこと」という表題は消失している。

本資料の第二章から第六章は『看護覚え書』の「一〇五章のタイトルに対応している。また第七章は「食事指導原則」となっていて、食事に関することはこの章だけであるが、『看護覚え書』の方は第六章「食事」、第七章「どんな食べ物を?」と二つの章に増えている。以下本資料の第八章から十二章は『看護覚え書』の第

八章から十二章の章に対応した内容となっている。

本資料では第十三章は「不適切な返答」となっているが、『看護覚え書』では「病人の観察」となっており、書いてある内容がわかりやすいタイトルとなっている。第十四章は「よい看護婦の証し」となっているが、『看護覚え書』では「結論」となっており「よい看護婦の証し」という表題は消失している。本資料には『看護覚え書』にある付録はついていない。

これらのことから、本資料と『看護覚え書』の構成を比較した場合、『看護覚え書』の方がいわゆる本として体裁が整ってきていることがわかる。

(四) 各章の内容

表2は本資料の第一章と『看護覚え書』のプロローグ、以下それぞれ対応する各論の章のタイトルと内容を比較したものである。比較の便宜上『看護覚え書』の原典の各章に番号は付されていないが、各章に番号を付した。内容の差異の分類として(一)タイトルの全面変更、(二)タイトルの部分変更、(三)文章の加筆、(四)本文の脚注への移動、(五)文章の位置移動(同じ章内での前後の移動)、(六)文章の位置移動(章外への移動)の六つを用いた。

表2をもとに「まえがき」「目次のタイトル」「各章の内容」を比較した結果、『看護覚え書』の方は、タイトルの全面変更や部分変更が行われた結果、全体として表現がわかりやすくなり、各章の文章の量が増えて内容が充実してきていることがわかる。加筆された文章の量は本文から脚注へ移動した部分や一段落内で部分的に増加したりする場合もあって正確には数えられないが、文章の段落数で比較した場合、約五〜六割となっている。また小見出しがついて書いてある内容がわかりやすくなっている。

表2 “The Art of Nursing”と『看護覚え書』の各章のタイトル・内容の比較

“The Art of Nursing”	『看護覚え書』	内容の差異
1. 医者任せにしないこと	プロローグ	1) 3) 6)
2. 外気は危険か?	1. 換気と保温	2) 3) 4)
3. 家屋の衛生	2. 家屋の衛生	3) 4) 5)
4. 細かすぎる看護婦	3. ちょっとした管理	1) 3) 5)
5. 音の害	4. 物音	2) 3) 4)
6. ちょっとした配慮	5. 変化のあること	1) 3) 4)
7. 食事指導原則	6. 食事	2) 3)
	7. どんな食べものを?	3)
8. 寝具との奮闘	8. ベッドと寝具	2) 3) 4)
9. 太陽光線の役割	9. 光	2) 3)
10. よどんだ部屋	10. 部屋と壁の清潔	2) 3) 4)
11. あかの危険性	11. 身体の清潔	1) 3)
12. 害ある見舞い客	12. 期待や助言のおしやべり	1) 3) 4)
13. 不適切な返答	13. 病人の観察	1) 3) 4) 5)
14. よい看護婦の証し	結論	1) 3) 4) 6)

四、考 察

(一) 『看護覚え書』の改訂過程とその内容の比較

いわゆる『看護覚え書』の第一版は一八五九年十二月末に出版され、出版二カ月以内に一万五千冊が売れた。『看護覚え書』の原型であり、ナイチンゲールの看護の精髓である。構成は序章のつぎに、十三章の章立てで最後に結論がきている。ナイチンゲールは『看護覚え書』をたびたび加筆・訂正したが、大幅な改訂は第二版の一回であり、しかも書き加えはしたが削除や変更はしなかったと言つてよい。^⑩

第一版と第二版との最も大きな違いは、第二版には第一版にはない「看護婦とは」で始まる補章が新たに加わっていることである。その他には各章各所に相当量の加筆、脚注の本文への組み入れ、若干の文章の位置移動が見受けられる。また第二版には、第一版にはない本文の要約(ダイジェスト)がまえがきと第一章の間に挿入されている。第二版では「まえがき」、「ダイジェスト」、「プロローグ」、「十三章の各論」、「結論」、「補章」という構成である。「補章」は七つの項目で構成され、最初に「看護婦とは何か」がきて、つぎに「回復期」

がきている。

第二版と第三版の大きな違いは第三版には第十六章に「赤ん坊の世話」が加わっていることである。つぎに第三版では第二版の「補章」のなかから「回復期」と「看護婦とは何か」だけを取り出し、独立した第十四章「回復期」と第十五章「看護婦とは何か」の二つの章に起こしている。それに「赤ん坊の世話」が第十六章に加わり、最後は「結論」で終わる構成である。さらに第三版では第一版・第二版にあった各章の小見出しは全部削除されている。

第三版を書いた目的は、できるだけ価格を安くして多くの人に作品を読んでもらうことにあった。スクレトコヴィッチによると、そのためにナイチンゲールは三つの工夫をしている。すなわち、まず第二版にあった文学その他の話の大部分を削っている。次に普通の人々の不健康な習慣の例を差し替えている。以前のものでは、金持ちの気取った習慣を批判していたが、第三版ではあらゆる階級の女性について語ることで、自分の言いたいことをもっと普遍化している。

三番目にはやさしい言葉づかいにしたことである。このため第一版と第二版の序章にあった「病気は回復過程である」という有名な文章が削られている。また第二版の補章にあった「失恋が動機で看護婦になるといつてもなれるものではない」と看護についての世間一般の認識不足を批判しているところを、第三版では愛情深いハートだけではよい看護婦になれないと、皮肉な調子を抑えている¹³⁾。

スクレトコヴィッチの編集による『看護覚え書』の決定版では、第二版をもとに三カ所についてかなりの分量の修正を加えている。第一に「住居の衛生管理」の追加事項で下水溝からの空気との因果関係を説明し、もっと注意して建設するようという解決策を出している。第二と第三の追加部分は「食物」という章の結論に使うつもりだったものである。第二の部分は標準以下に薄めたミルクと出来合いのベビーフードの販売について特に警告している。第三の部分は人種を退化させる食習慣に関するものである¹⁴⁾。

これらの五つの改訂過程から、ナイチンゲールが他の自分の著作に比べて『看護覚え書』という自分の著作をいかに

大切に考えていたかがわかる。

(二) 『看護覚え書』の書誌学的研究における一九四六年クロウド・モリス社刊“*The Art of Nursing*”の
意義

〔一〕本資料の信頼性

スクレットコヴィツチは研究論文「『看護覚え書』について」のなかの、「計画と出版」の章の一、初版、のところで、次のように述べている。ナイチンゲールが看護に関する本を出版しようと思っていたことの最も古い証拠として、親しい助言者ジョン・サザランド博士の^⑪一八五九年二月一〇日のナイチンゲール宛のメモがある。このメモからナイチンゲールが『看護覚え書』の概要と書かれた断片を検討し批評してくれるようにサザランドに頼んだことは確かであるとしている。この二日後、つまり一八五九年二月十二日付けの手紙で、サザランドはナイチンゲールに、長い激励のコメントを送っている。そのコメントで、取り組み方、読者層、文体などがまだ決まっていなかった、計画の初期段階の様子をよくうかがい知ることができる、^⑫という。

この手紙のなかに、サザランドが次のように述べている部分がある。「最初のページの独断は調子を和らげたらと思います。なぜなら、これは著名人の間に論争を引き起こし、批評の一般的な傾向として、医師はあなたに反感をもち、改善しない方向に向くのではないかと思うからです。医師を怒らせないようにすることは非常に大切です」^⑬

この部分の記述から、ナイチンゲールがサザランドに送った初期の原稿には最初のページに独断的で「著名人の間に論争を引き起こすような記述」、「医師が読んだら反感をもつような記述」があったことが想定される。この「著名人の間に論争を引き起こすような記述」、そして「医師が読んだら反感をもつような記述」とはどのような内容なのだろうか。

実は今回の研究資料“*The Art of Nursing*”の最初のページとなる「まえがき」の部分に「すべての女性は看護婦で

ある」というタイトルがついていること、「まえがき」の書き出しともいえる最初の文章は「女性をよい看護婦にするには、失恋とか、目的を見失ったとか、世の中全体にいや気がさした、看護ぐらいしかできることがない、という理由があれば十分だ、との考えが、男ばかりでなく女にも広く見られるようである」となっており、『看護覚え書』においてはこれらのタイトルが消失したり、文章が本の最後の「結論」の部分の文中に配置されていることから、これらの文章がサザランドの指摘した文章に相当するものと考えられる。また目次構成を見ると第一章は「医師にそれをまかせてはいけない」というタイトルとなっており、医師が読んだら反感をもつような表現とも考えることができる。

サザランドの一八五九年二月十二日付けの手紙では、検討しているものがナイチンゲールの手書きの原稿ではなく、校正刷りであることを明らかにしている。この場合の校正刷りは『看護覚え書』のナイチンゲールの手書きの草稿を出版元となったHarrison社が校正刷りとして印刷したものと考えられる。校正刷りとは、論文を印刷した紙片（ゲラ刷り）が数ページ（「まとめた校正刷り」）で校正され、最終印刷に回し発行する前にチェックをもらうよう著者に戻されるものである。十九世紀の著者の多くは、このように読みやすくなった段階で、非常に大幅に追加や修正を行っていた。¹⁸

サザランドの批評を受け取ってから四カ月後の一八五九年六月八日に、ナイチンゲールは予期せぬ物音が患者に与える恐るべき効果について、ウィリアム・エイトキン博士に手紙を書いている。このなかでナイチンゲールは「個人的に読んでいただくために、私が看護について書いた小冊子を同封します。（これは本当に「秘密」です）」と書いている。スクレトコヴィッチは、この手紙でふれている「私が看護について書いた小冊子」についてはこれ以上のことは何も知られていない、これがサザランドのいう「校正刷り」かもしれない、書いている。¹⁸

サザランドのナイチンゲール宛の一八五九年二月十二日付けの手紙と一八五九年六月八日のナイチンゲールのウィリアム・エイトキン博士への手紙から、一八五九年の二月には『看護覚え書』第一版の草稿となる何らかの元原稿の存在が想定される。

スクレットコヴィッチは「一八五九年に印刷所に送った手書きの原稿が現存しないようなので、『看護覚え書』の最初の執筆における思考過程を検証することはできない」と書いているが、今回研究資料として取り上げたこの“The Art of Nursing (1859)”こそが、以上のような書誌的な事項と本のもつ構成と内容から、その手書き原稿の印刷本と考えることができるのではないだろうか。

〔1〕本タイトルG “The Art of Nursing” の信憑性

本資料のタイトルは“The Art of Nursing”となっているが、この本のなかで、“art”の単語がでてくるのは最後の章の最後のページの三カ所のみである。art of nursingとしての熟語としての使用はみられない。

ナイチンゲールの看護思想において“art”の考え方は核になるもの一つと位置づけられる。彼女の看護における“art”の考え方がでてくるのは『看護覚え書』(一八五九)で、artの用語は全部で一〇カ所に使用されている。そのうちart of nursingとしての用語がでてくるのは序章に二カ所と結論に一カ所の計三カ所である。アートの考え方が発展していくのは、『アグネス・ジョーンズをしのんで』(一八七二)、『看護婦の訓練と病人の看護』(一八八二)、『病人の看護と健康を守る看護』(一八九三)などの後期の著作文献においてである。ナイチンゲールのアートの考え方の発展過程の観点からみた場合、この一八五九年の段階ではアートの用語を使用してはいるが、それについて論を発展させるにはまだ深まりのみられない時期であり、ナイチンゲール自身がいわゆる『看護覚え書』の草稿の段階にある原稿に“The Art of Nursing”というネーミングを与えることは考えにくい。実際にタイトルのわりにアートの用語の使用箇所は三カ所であり、タイトルと内容の不一致がみられる。これらの理由からこのネーミングは本資料の出版社であるクロウド・モリス社が一九四六年の時点でナイチンゲールの個人的な看護覚え書きの草稿に新たに名づけたものと想定される。背表紙のタイトルが“The Art of Nursing”でつぎに書かれているのが著者のナイチンゲールの名前ではなく、出版社のCLAUD MORRISとなっていることを示していると思われる。

【三】一九四六年にクロウド・モリス社から“The Art of Nursing”が発刊された経緯

一九四六年にクロウド・モリス社から発刊された“The Art of Nursing”の内容はナイチンゲールの個人的な看護覚え書の改訂された新版で一八五九年のものであった。

ナイチンゲールが『看護覚え書』を著した一八五九年という年は、彼女がクリミア戦争終結によりイギリスに帰国した一八五六年から約三年後にあたる。実際に『看護覚え書』が発刊されたのは一八五九年十二月であるが、この三年間にナイチンゲールは、『英国陸軍の保健』（一八五八）、『女性による陸軍病院の看護』（一八五八）や『病院覚え書』（第一版）（一八五八）、を執筆し、また一八六〇年に著される哲学書『思索への示唆』を準備しながら同時に『看護覚え書』の準備をしていたことがわかる。また一八六〇年には『看護覚え書』（改訂増補、第二版）を、一八六一年には『労働者階級のための看護覚え書』（第三版）を著すなど精力的に活動している。

一八六〇年にはこのような多くの知的活動を行いながら、セント・トマス病院にナイチンゲール看護学校を創設する。今回研究の対象とした“The Art of Nursing”が一八五九年に著されたという記載があること、また内容を検討した結果、『看護覚え書』の草稿と考えられること、サザーランド博士の手紙から、一八五九年の二月の段階で『看護覚え書』の草稿と考えられる元原稿に意見を求められていることなどから、一八五九年の早々には『看護覚え書』の草稿と考えられる元原稿が存在していたことがわかる。実際に『看護覚え書』が出版されたのが一八五九年の十二月であることから、この十カ月の間に『看護覚え書』を完成させるための知的作業が精力的に行われていたことがわかる。

それではなぜビショップの権威ある書誌学的研究の本にこの本が掲載されなかったのだろうか。その理由としてはこの本が自費出版に近いようなかたちで少数しか発刊されなかったことが推測される。それと一九四六年は第二次世界大戦終了直後で、イギリス国内も混乱のさなかにあり、大きな図書館でも本の収集が十分行われにくかったことも予想される。

出版社のクロウド・モリス社については、大英図書館のカタログで調べた限りでは、この出版社から出版された本が一九四五〜一九四七年の間に少なくとも十数冊はあったようである。それ以前も以後も大英図書館に保管されているものはない。出版物の内容もさまざま、看護・医療に関するものはタイトルを見たかぎりではこの本一冊のみである。この出版社は現在ロンドンには存在していない。²⁴

これでは次に「個人的な看護覚え書きの改訂された新版である」ということの意味はどう解釈されるのだろうか。クロウド・モリス社がナイチンゲールの手紙の借用に関してミスP・E・ナットに、ナイチンゲールの『看護覚え書』第一版の借用に関してC・H・ペインター大佐に謝辞を述べていることから、Harrison社からナイチンゲールに戻されたナイチンゲールの『看護覚え書』の草稿と思われる手紙を何らかの理由で所持していたミスP・E・ナットのことを知ったクロウド・モリス社が、それをすでに出版されていた『看護覚え書』の体裁を参考に形を整えて出版したことが考えられる。

最後に「個人的な看護覚え書き」と明記していることの意味は、『看護覚え書』の草稿となった、出版され公表される以前のナイチンゲール自身の個人的な看護覚え書、ととらえることができる。

五、おわりに

現在イギリスの『看護覚え書』の書誌学的研究者スクレットコヴィッチは「一八五九年に印刷所に送った手書きの原稿が現存しないようなので、『看護覚え書』の最初の執筆における思考過程を検証することはできない」と書いて²⁵いるが、今回入手した資料の内容を分析した結果、「The Art of Nursing」(一九四六)は『看護覚え書』(一八五九)の草稿の段階の原稿である可能性が高いことがわかった。

ナイチンゲールは『看護覚え書』を何度も改訂しているが、『看護覚え書』第一版を出版するにあたり、草稿段階の原

稿においては「すべての女性は看護婦である」こと、そして「医師に何でもまかせるのではなく、その前にすることがある」ことを強調したかったこと、さらに「よい看護婦の証し」とは何であるかを強調したかったことがわかる。

しかしサザランド博士の助言を取り入れ、知識人の間に論争を引き起こすような表現をやめたこと、またそのような表現を位置的に本の最初の部分ではなく最後の部分に置いたこと、医師の反感を買うような表現をやめたこと、良い看護婦であるにはどうあればよいかというような抽象的な表現をやめたことがわかるのである。これらのことからナイチンゲールが、『看護覚え書』（一八五九）を世に問うあたり、何を強調し全面に出すタイトルとするのか、何を文中の表現とするのか専門家に意見を求め、十分に推敲していたことがわかる。このことからナイチンゲールが自分の作品のなかで『看護覚え書』をいかに真剣に考えていたかがわかる。このように何度も推敲したと思われる『看護覚え書』（一八五九）は、出版後に高い評価を得ることになるのである。²⁶⁾

本研究の限界として、P.E. Nutt という人物が特定できないこと、“The Art of Nursing”の原稿となったミスP・E・ナットの所持していたナイチンゲールの手紙の所在が不明であることがあげられるので今後の課題としたい。

註

- (1) Florence Nightingale: Notes on Nursing—what it is, and what it is not. Harrison, 59, Pall Mall, 1859, 79pp. 原文と邦訳はフロレンス・ナイチンゲール他、小玉香津子、尾田葉子訳『ノーツ・オン・ナーシング』日本看護協会出版会、一九九七。として出版されている。邦訳のみは、スキート、小玉香津子、尾田葉子訳『ふたつの看護覚え書』日本看護協会出版会、一九八五。としても出版されている。

初版に関する書誌学的研究論文として、Skrekowicz, V.: Florence Nightingale's Notes on Nursing: The First Version and Edition, The Library, Ser. 6, Vol. 15, No.1, Oxford University Press, 1992. がある。なおナイチンゲールの主要な著作九編の復刻版が近年刊行された。Edited by Loli Williamson, Florence Nightingale and the Birth of

Professional Nursing, London Guildhall University, 1999. 全六巻のこのシリーズには『看護覚え書』の三つの版がすべて収録されている。

(2) Florence Nightingale: Notes on Nursing: what it is and what it is not. New edition, revised and enlarged. Harrison, 59, Pall Mall, 1860. 237pp. 原文は『原文看護覚え書』現代社、から出されているが、原書にある目次のダイジェスト、小見だしは削除されている。邦訳は現代社『ナイチンゲール著作集』第一巻他、がある。

(3) Florence Nightingale: Notes on Nursing for the Labouring classes. Harrison, 59, Pall Mall, 1861. 96pp. 原文と邦訳は第十六章の「赤ん坊の世話」のみ註(2)の『原文看護覚え書』と『ナイチンゲール著作集』第一巻に収録されている。

(4) スクレトコヴィツチ、助川尚子訳「ナイチンゲール看護覚え書決定版」医学書院、一九九八。原著 Skretkowitz, V. 'Florence Nightingale's Notes on Nursing (Revised, with additions)', Bailliere Tindall, 1992. この本の最初の部分の vii-xxxviii までのページはナイチンゲールの『看護覚え書』の解説となっている。ヴィクター・スクレトコヴィツチ (Skretkowitz, Dr. Victor) は英国の人物史、文明史の研究者でスコットランドの Dundee 大学で英語を教えながら、ナイチンゲール博物館のアドバイザーも務めている。同書に参照。

(5) 本資料が紹介されていたイギリスの古書店のカタログは "Patorick Pollack", January, 1999. である。なお本資料は他の看護関係の文献二つとともに三冊で四十ポンドの価格であった。カタログ中の本資料の番号は五十九番である。

(6) Bishop, W. J. and Sue Goldie. A Bio-Bibliography of Nightingale. Dawsons, 1962. この本については、小南吉彦「ナイチンゲール文献について」『綜合看護』七巻三号、一九七二。を参照。なおナイチンゲールの手紙や著作に関する文献として次の二文献がある。金井きよみ「ナイチンゲール文献とその周辺—私の F・ナイチンゲール文献探索旅行」『綜合看護』十四巻一号、六七〜九〇頁、一九七九。金井一薫「ナイチンゲール文献の概要と『看護覚え書』の価値」『ナイチンゲール看護論入門』二六二〜二七九頁、現代社、一九九三。

(7) 前掲書(5)、に同じ

(8) ナイチンゲール博物館の館長アットウェル (Alex Attewell) 氏に尋ねたところ、本資料はナイチンゲール博物館でも一

九八八年末に入手したばかりで、この本に書かれている二人の人物については知らないとのことであった（一九九九年三月十二日面接による問い合わせによる）。Oxford University Press の The Dictionary of national biography にこの二人の名前は見あたらない。ADAM & CHARLES BLACK の WHO WAS WHO VOL. IV に PAYNTER, Col. Camborne Haweis (一八六四～一九四九) の名前があり、実在の人物であることが判明した。

- (9) 『看護覚え書』の目次の邦訳は、フロレンス・ナイチンゲール他、小玉香津子、尾田葉子訳『ノーツ・オン・ナーシング』日本看護協会出版会、一九九七。に収録されている尾田葉子訳を参考にした。
- (10) スキート、小玉香津子・尾田葉子訳『ふたつの看護覚え書き』日本看護協会出版会、一九八五。マ、訳者序。
- (11) 前掲書 (10)
- (12) 小玉香津子「フロレンス・ナイチンゲール『労働者階級のための看護覚え書』の実際およびその今日的意味について」『綜合看護』三十二巻、二号、一九九七。
- (13) 前掲書 (4) ' XLIII
- (14) サザランド博士 (Sutherland, Dr. John, 一八〇八～一八九一) は公衆衛生の権威でクリミアの衛生委員会、兵舎委員会のメンバーである。ナイチンゲールのカウンセラーおよび医療アドバイザーとなる。衛生問題についてはしばしば彼女に助言し、本の編集を手伝った。ナイチンゲールは彼を信頼し、たいていその助言を取り入れた。ベイリィ、助川尚子訳『ナイチンゲールの言葉』二四〇～二四一頁参照、医学書院、一九九四。なおサザランドに関する文献として、コープ、小池明子・田村真訳『ナイチンゲールと医師たち』日本看護協会出版会、一九七九。がある。
- (15) 前掲書 (4) ' XIX
- (16) 前掲書 (4) ' XVIII
- (17) 前掲書 (4) ' XX
- (18) 前掲書 (4) ' XXI
- (19) 前掲書 (4) ' XXV
- (20) 小川典子『ナイチンゲール「看護覚え書」の構造を読む―方法としての書誌学的研究』ゆみる出版、一九九九、五十二

頁、一〇六頁を参照。

- (21) ナイチンゲール「アグネス・ジョーンズをしのんで(一八七二)」『ナイチンゲール著作集』第三巻、現代社、一九七七。
- (22) ナイチンゲール「看護婦の訓練と病人の看護(一八八二)」『ナイチンゲール著作集』第二巻、現代社、一九七四。
- (23) ナイチンゲール「病人の看護と健康を守る看護(一八九三)」『ナイチンゲール著作集』第二巻、現代社、一九七四。
- (24) Publishers International Directory 1998 による。
- (25) 前掲書(4)′XXXV
- (26) 五十嵐節「ナイチンゲール『看護覚え書』当時の書評が問いかけるもの」『埼玉医科大学短期大学紀要』第二巻、一九九一。

(山梨県立看護大学)

**“The Art of Nursing” by Florence Nightingale, Published by Claud
Morris Books Limited and Printed in 1946, which is
Considered a Draft of “Notes on Nursing”**

by Machiko HIRAO

There are three versions of “Notes on Nursing,” that is Nightingale’s most famous work. Recently a book that is considered a draft of Nightingale’s “Notes on Nursing,” was published by Claud Morris Books Limited in 1946. This book is not contained in the “Bio-Bibliography of

Florence Nightingale” by Bishop and Goldie.

The publisher says about the source that this book is an entirely new and revised edition of Miss Florence Nightingale’s personal notes on nursing, first written in 1859. The publisher acknowledges with gratitude the cooperation of Miss P.E. Nutt, in making available correspondence of Florence Nightingale and of Colonel C.H. Paynter in preparing a copy of the first edition of Miss Nightingale’s “Notes on Nursing”.

This book is composed of the preface and 14 chapters. The preface’s title is “Every woman is a nurse”, and there is Nightingale’s autograph with the date 1859 at the end of the preface. There are some differences between “The Art of Nursing” and “Notes on Nursing”. In the former, there is a title to the preface and the first chapter’s title is “Don’t leave it to the doctor” and the last chapter’s title is “Testament for a good nurse”. In the latter, there is no title to the preface and the content of the former’s first chapter is put only as a prologue before the first chapter. The former’s last chapter’s title is changed to “Conclusion”. Further, each chapter has been somewhat expanded.

From the above, we can see that, at what may be considered the draft stage of “Notes on Nursing”, Nightingale wanted to emphasize the following things: “Every woman is a nurse”, “Don’t leave it to the doctor,” and “Testament for a good nurse”. However, we can see that, at the stage of publishing of “Notes of Nursing”, Nightingale had second thoughts. She complied with advice she received to avoid dissension among the knowledgeable and antipathy from doctors, and she settled on plain expression to make the contents clear to all.